

県営特殊農地保全整備事業（横尾下地区）に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

下牧遺跡・上田屋敷遺跡

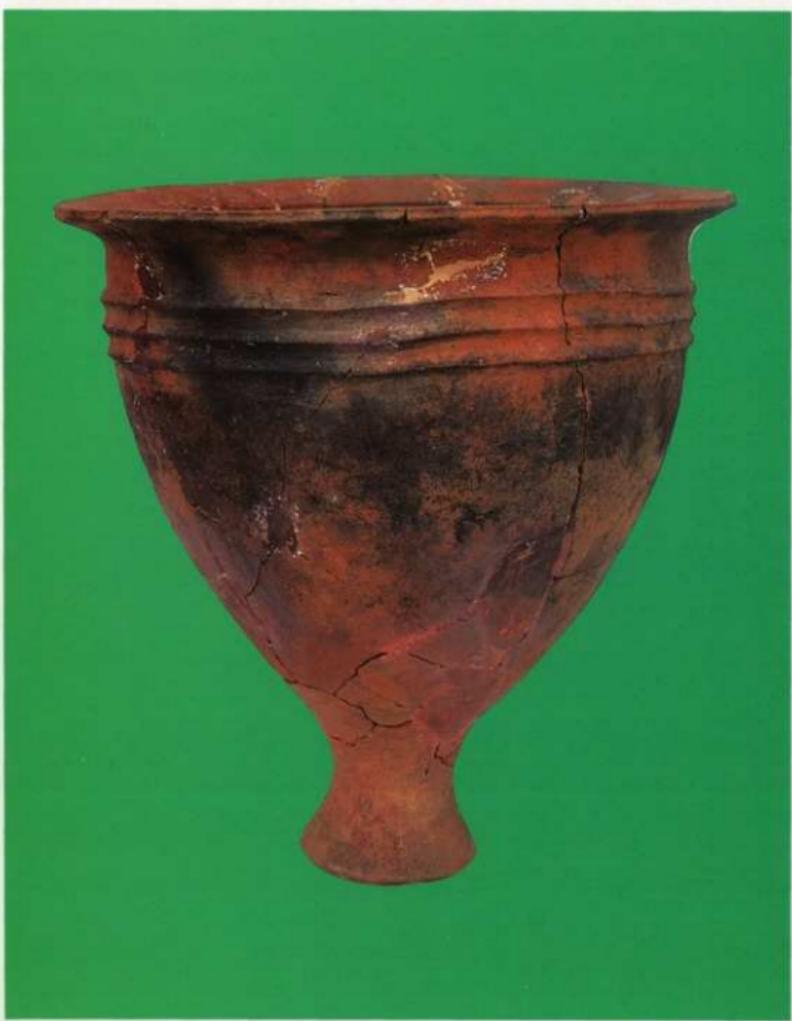
1989年3月
鹿児島県曾於郡志布志町教育委員会



上田屋敷遺跡

下牧遺跡

遺 跡 遠 景



上田屋敷遺跡採集土器

序 文

志布志町は、埋蔵文化財包蔵地が数多く、前川・安楽川の両河川流域を中心に現在約170箇所が確認されております。

これらの遺跡は、近年土地基盤整備事業等の開発行為に伴う確認調査によって、徐々にその性格が判明してきております。

今回の調査は、県営特殊農地保全整備事業横尾下地区の事業実施に先立ち、計画地区内に立地している下牧遺跡・上田屋敷遺跡について、志布志町が調査主体となって実施したものです。

ここに、その調査結果を報告書として刊行いたしますが、この報告書が文化財の保護と学術研究のため広く活用されることを願ってやみません。

発刊にあたり、調査から報告書刊行まで御指導頂いた県教育庁文化課の調査員をはじめ、指導者、作業協力者、及び協力頂いた土地所有者、又、各方面行政機関の皆様に、心より感謝を申し上げます。

平成元年三月

志布志町教育委員会

教育長 野間 隆

例　　言

1. この報告書は県営特殊農地保全整備事業（横尾下地区）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 本書で用いたレベル数値はすべて海拔絶対高である。
3. 遺物番号はすべて通し番号とし、挿図・図版とも一致する。
4. 遺物は志布志町教育委員会で保管し、展示活用する。
5. 本書の執筆は次のとおりである。

第Ⅰ、Ⅲ、Ⅳ、Ⅴ章	井ノ上
第Ⅱ章	米元
6. 本書の編集は井ノ上、米元が行った。
7. 遺物出土状況図の中の△印は疊の出土状況である。

目 次

序文

例言

目次

第Ⅰ章 調査の経過.....	1
第1節 調査に至るまでの経過.....	1
第2節 調査の組織.....	1
第3節 調査の経過及び概要.....	2
第Ⅱ章 遺跡の位置・環境と周辺遺跡.....	4
第1節 遺跡の位置・環境.....	4
第2節 周辺遺跡.....	5
第Ⅲ章 層位.....	10
第Ⅳ章 各トレンチの調査.....	13
第Ⅴ章 まとめにかえて.....	30

插 図 目 次

第1図 上田屋敷遺跡採集土器.....	7
第2図 周辺遺跡.....	8
第3図 土層模式柱状図.....	10
第4図 調査区周辺の地形.....	11
第5図 トレンチ配置図.....	12
第6図 1、2トレンチ.....	13
第7図 3トレンチ.....	14
第8図 3トレンチ出土遺物(1).....	15
第9図 3トレンチ出土遺物(2).....	16
第10図 4、5トレンチ.....	17
第11図 5トレンチ出土遺物(1).....	18
第12図 5トレンチ出土遺物(2).....	19
第13図 6、7、8トレンチ.....	20
第14図 9、10トレンチ.....	21
第15図 8、9トレンチ出土遺物.....	22
第16図 10トレンチ出土遺物.....	23
第17図 11、12トレンチ.....	24
第18図 11トレンチ出土遺物.....	25
第19図 13、14、15、16トレンチ.....	26

第20図	13、14トレンチ出土遺物	27
第21図	14トレンチ出土石器	28
第22図	17、18、19、20トレンチ	29
第23図	20トレンチ出土遺物	29

図版目次

図版1	遺跡遠景(東から)・遺跡近景(10、11トレンチ付近)	31
図版2	調査風景(5トレンチ)・調査風景(11トレンチ)	32
図版3	1トレンチ土層断面・3トレンチ柱穴確認状況	33
図版4	3トレンチ遺物出土状況・4トレンチ土層断面	34
図版5	5トレンチ遺物出土状況・5トレンチ土層断面	35
図版6	8トレンチ遺物出土状況・9トレンチ遺物出土状況	36
図版7	9トレンチ土層断面・10トレンチ遺物出土状況	37
図版8	10トレンチ土層断面・11トレンチ遺物出土状況	38
図版9	12トレンチ土層断面・13トレンチ土層断面	39
図版10	14トレンチ遺物出土状況・15トレンチ土層断面	40
図版11	18トレンチ土層断面・19トレンチ土層断面	41
図版12	20トレンチ遺物出土状況・上田屋敷遺跡採集遺物	42
図版13	出土遺物(1)	43
図版14	出土遺物(2)	44
図版15	出土遺物(3)	45
図版16	出土遺物(4)	46
図版17	出土遺物(5)	47
図版18	出土遺物(6)	48
図版19	出土遺物(7)	49
図版20	出土遺物(8)	50
図版21	下牧遺跡北東端部壁面遺物露呈状況・調査参加者	51

表目次

第1表	周辺遺跡一覧表(1)	6
	(2)	7
第2表	志布志町内遺跡の主な文献資料	9

第Ⅰ章 調査の経過

第1節 調査に至るまでの経過

鹿児島県教育委員会（以下県文化課）では、県下の市町村教育委員会と連携し、文化財の保存・活用をはかるため、各開発関係機関との間で、事業区域内における文化財の有無、及びその取り扱いについて事前に協議し、諸開発との調整をはかっている。

この事前協議制に基づき、鹿児島県農政部農地整備課（大隅耕地事務所）は志布志町内において「県営特殊農地保全整備事業（横尾下地区）」を計画し、事業地区内の埋蔵文化財の有無について県文化課に照会した。

これをうけて、昭和61年4月当該地区的埋蔵文化財分布調査を県文化課及び志布志町教育委員会社会教育課と合同で実施した。

分布調査の結果、当該事業区域内には周知の遺跡である、下牧遺跡・上田屋敷遺跡が含まれており、土器片などの遺物が散布しているのが確認されたため、文化財の保存と事業の推進との調整に資することを目的として、国及び県の助成を得て、志布志町教育委員会が調査主体となり、発掘調査を実施することになった。調査は県文化課の協力を得て、昭和63年6月13日から7月11日までの21日間実施した。

第2節 調査の組織

調査主体者	志布志町教育委員会			
調査責任者	々	教 育 長	野 間 隆	
調査事務	々	社会教育課長	西 坂 弘 行	
	々	参事兼課長補佐	川 崎 卓 男	
	々	文化体育係長	前 田 泰 郎	
	々	主 査	桂 地 正 昭	
	々	々	満 石 富 士 雄	
	々	主 事	谷 口 隆 博	
	々	々	米 元 史 郎	
	々	々	荒 平 安 次	
	々	々	杉 田 美 保	
調査担当者	鹿児島県教育庁文化課 志布志町社会教育課	主 事	井ノ上秀文 米 元 史 郎	
調査指導者	鹿児島県文化財保護審議会委員	河 口 貞 德		

なお、調査企画等において、県教育庁文化課長・吉井浩一、同課長補佐・奥園義則、同主幹立園多賀生、同文化財研究員兼埋蔵文化財係長・吉元正幸、同企画助成係長・京田秀尤、同係の各氏の指導・助言を得た。

第3節 調査の経過及び概要

遺跡の地表面には土器片等が散布し、上田屋敷遺跡からは昭和44年に弥生土器が採集されていることから、これらの遺跡の範囲・性格等の確認を目的として確認調査を実施した。トレチの大きさは $2 \times 4\text{m}$ を基本とした。調査の結果、上田屋敷遺跡から縄文早期及び晩期の遺物包含層が確認された。以下、調査の経過については日誌抄により略述する。

- 6月13日（月）用具運搬、点検、確認。作業員へ調査方法、調査上の留意点の説明。1、2トレチ設定、掘り下げ。
- 6月14日（火）1、2トレチ掘り下げ。
- 6月15日（水）1、2トレチ掘り下げ終了。3、4トレチ設定、掘り下げ。
- 6月16日（木）1、2トレチ土層断面清掃、写真撮影、トレチ位置図作成。3トレチ掘り下げ、土器片出土。4トレチ掘り下げ終了、土層断面清掃、写真撮影。5、6トレチ設定、掘り下げ。
- 6月17日（金）3トレチ掘り下げ、清掃、遺物出土状況写真撮影。4トレチ土層断面実測、トレチ位置図作成、埋め戻し。5トレチ掘り下げ、遺物出土。6トレチ掘り下げ終了、土層断面写真撮影、実測、トレチ位置図作成、埋め戻し。7、8トレチ設定、掘り下げ。
- 6月20日（月）1トレチ土層断面実測。3トレチ遺物出土状況実測、トレチ位置図作成、掘り下げ。5トレチ掘り下げ、遺物多し。7、8トレチ掘り下げ。9、10トレチ設定、掘り下げ。
- 6月21日（火）2トレチ土層断面実測。3トレチ掘り下げ、ピット確認、検出、実測。5トレチ清掃、遺物出土状況写真撮影。7トレチ掘り下げ。8トレチ清掃、遺物出土状況写真撮影、実測、トレチ位置図作成、掘り下げ。9トレチ清掃、遺物出土状況写真撮影。10トレチ掘り下げ。11トレチ設定、掘り下げ。
- 6月22日（水）3トレチピット写真撮影、掘り下げ。5トレチ遺物出土状況実測、トレチ位置図作成、掘り下げ。7トレチ掘り下げ終了、土層断面写真撮影。8トレチ掘り下げ。9トレチ遺物出土状況実測。10、11トレチ掘り下げ。12トレチ設定、掘り下げ。
- 6月23日（木）1、2トレチ埋め戻し。雨のため午後の作業中止。
- 6月24日（金）雨のため作業中止。今後の調査について、トレチ設定場所等の検討。実測図、出土遺物等の整理。
- 6月27日（月）3トレチ掘り下げ、清掃、遺物出土状況写真撮影、実測。5トレチ掘り下げ、遺物出土状況実測。9トレチ掘り下げ。10、11トレチ清掃、遺物出土状況写真撮影。12トレチ掘り下げ。
- 6月28日（火）3、5トレチ掘り下げ。7トレチ位置図作成。9トレチ掘り下げ。10、

- 11トレンチ遺物出土状況実測、トレンチ位置図作成。12トレンチ掘り下げ。13トレンチ設定、掘り下げ。
- 6月29日（水） 3、5、8トレンチ掘り下げ。9トレンチ土層断面写真撮影。10トレンチ掘り下げ、清掃、写真撮影。11トレンチ掘り下げ。12トレンチ掘り下げ終了。13トレンチ掘り下げ、礫、土器片出土。
- 6月30日（木） 2トレンチ埋め戻し。7トレンチ土層断面実測。8、10、11、13トレンチ掘り下げ。13トレンチ遺物出土状況写真撮影、実測、トレンチ位置図作成。
- 7月1日（金） 3、5、8トレンチ掘り下げ終了、清掃。10、11トレンチ掘り下げ。12トレンチ清掃。13トレンチ掘り下げ終了、清掃、土層断面写真撮影。14、15トレンチ設定、掘り下げ。
- 7月4日（月） 3トレンチ土層断面写真撮影。5トレンチ土層断面実測。8トレンチ土層断面写真撮影。9トレンチ土層断面実測。10、11トレンチ掘り下げ。12トレンチ土層断面写真撮影。13トレンチ土層断面実測。14トレンチ掘り下げ、礫、遺物出土。15トレンチ掘り下げ、トレンチ位置図作成。16トレンチ設定、掘り下げ、トレンチ位置図作成。
- 7月5日（火） 5、8トレンチ土層断面実測。10、11トレンチ掘り下げ。14トレンチ掘り下げ終了、遺物出土状況写真撮影、実測、トレンチ位置図作成。15トレンチ掘り下げ終了、土層断面写真撮影。16トレンチ掘り下げ。17、18トレンチ設定、掘り下げ。
- 7月6日（水） 10トレンチ掘り下げ終了、土層断面写真撮影。11トレンチ清掃。12トレンチ土層断面実測、トレンチ位置図作成。14トレンチ土層断面写真撮影、実測。16トレンチ掘り下げ。17、18トレンチ掘り下げ、トレンチ位置図作成。19、20トレンチ設定、掘り下げ。
- 7月7日（木） 3トレンチ土層断面写真撮影。9トレンチ位置図作成。10トレンチ土層断面実測。11トレンチ土層断面写真撮影。15、16トレンチ土層断面写真撮影、実測。17、18トレンチ掘り下げ。19トレンチ掘り下げ終了、土層断面写真撮影。20トレンチ掘り下げ終了、遺物出土状況写真撮影、実測。
- 7月8日（金） 17、18トレンチ掘り下げ終了、土層断面写真撮影、実測。19トレンチ土層断面実測。20トレンチ掘り下げ終了、土層断面写真撮影、実測。3、7、8、9、12、13、14、15、20トレンチ埋め戻し。
- 7月11日（月） 3、15、5、10、11、16、17、18トレンチ埋め戻し。用具水洗い、点検、確認後収納。調査終了。
- 7月12日（火） から県教育庁文化課埋蔵文化財収蔵庫において整理作業を行った。

第Ⅱ章 遺跡の位置・環境と周辺遺跡

第1節 遺跡の位置・環境

本町は鹿児島県の東端部で、志布志湾の湾奥部に位置し、海岸線は東西に約10km、内陸部に向って約24kmで、南北に細長く延びる釣鐘形の形状をなしている。

北東から東側へは、宮崎県都城市及び串間市と接して県境をなし、北西から西へは、末吉町、松山町、有明町とそれぞれ接している。

南面する海岸線は、ほぼ中央に位置する市街地を挟んで、西側は砂浜海岸が続くのに比べ、東側は日南層群で構成される山陵が海までせまり、岩礁海岸を形成している。尚、市街地は、比高40m程のシラス台地の海食崖下に発達した古期砂丘帶上に立地している。これは約6,000年前の紀文海進の名残りと考えられる。

内陸部の地形は、山地と台地、それに河川に沿って小規模に発達した沖積低地に大別出来る。

北部から東部にかけての山陵地帯は、主に新生代古第三期の地層と考えられている日南層群よりも、南部列山系の西端域となり、これより西に拡がる広大なシラス台地（曾於丘陵地）には、この山系より派生する残丘状山地が、北東より南西方向に、散発的に、次第に小起伏となって延びている。この日南層群は、砂岩と頁岩及び両者の互層の三群で構成され、これら以外に石器用石材として加工しやすい火成岩等の原産地は近隣には得られない。

シラス台地は、並行して南流する中小の河川の活発な侵食作用によって、深い谷で分断され、さらにその支流によって、樹枝状に拡がる谷頭侵食で細かく刻み込まれており、大小幾多の台地が形成されている。又、谷底の低地とは急傾斜面や崖によって区切られている。

町内を流れる河川は西側を延長24kmの安楽川が、東側を延長15kmの前川がそれぞれ南流しており、他に北東山間部の四浦地区には大矢取川が宮崎県串間市を経て志布志湾へ注ぎ込んでいる。又これらの河川の中流域から下流域にかけては各所に大小の河岸段丘や谷底平野が形成されている。

このような地形のため、町内に分布する約170箇所の埋蔵文化財遺跡の多くは台地上に立地しているが、内陸山間部では、山陵に付隨するそれぞれ独立した小規模な山麓舌状台地基部（谷あいの湧水を利用するタイプ）、あるいはその辺縁部（台地下の河川を利用するタイプ）に立地しており、南部の広域な台地では、水源に遠い台地中央部に遺跡の立地は見られず、これらの辺縁部、もしくは台地に付隨する河岸段丘上に集中している。

今回発掘対象となった二遺跡も、下牧遺跡は、横尾下台地の東側辺縁部に立地し、上田屋敷遺跡は、さらにその台地の先端部が、一部侵食谷によって半島状に延びた尾根部に立地している。なお、この侵食谷の先端部には、かつて湧水があったことが知られており、遺跡もこの湧水を囲むように立地していたものと思慮される。

以上、志布志町の自然環境等を概観したが、この豊かな自然の恩恵を受けて、古代より連続とした人々の営みが繰り広げられていたことが偲ばれる。

第2節 周辺遺跡

ここでは縄文、弥生の遺跡について、時代を追ってその代表的な遺跡を紹介してみたい。

旧石器時代から縄文時代早創期の遺物を出土した遺跡として、東黒土田B、鎌石橋、井手平山ノ上等の遺跡がある。東黒土田B遺跡は昭和55年発掘され、隆帯文土器、舟形石組遺構、匙形石器等の他、木の実の貯蔵穴が出土し、放射性炭素測定の結果、国内最古の $11,300 \pm 130$ 年の測定値が示された。鎌石橋遺跡は昭和56年発掘され、細石刃、細石核、ナイフ形石器と共に隆帯文土器が出土し、他に、早・前期の土器が出土している。

縄文早期の代表的遺跡としては倉園B、石踊、柳、上園、上出水、潤ヶ野等の遺跡がある。倉園B遺跡は昭和57・58年に発掘され、石坂式、吉田式、前平式の各円筒系土器が出土し、住居跡、集石炉、配石等の遺構が検出された。中でも連穴土塙10基と、多量の石礫や剝片は貴重な資料となった。

縄文前期の代表的遺跡としては野久尾、石踊、片野洞穴等の遺跡がある。野久尾遺跡は昭和51・52年に発掘され、撫糸文、轟式、春日式等の土器が出土している。中でも轟式土器は約5,000点の出土遺物の約8割をしめ、この土器形式の究明に重要な資料となった。石踊遺跡も昭和51・52年発掘され、轟式、曾畠式はじめ、早期から晩期までの各時代の遺物が出土した。片野洞穴は昭和39年に発掘され、轟式、曾畠式以降近世に至るまでの各時代の遺物を出土し、他に多量の獣骨類や貝類も出土している。

縄文中期の遺跡は少なく、わずかに倉園A、宮ノ前、十文字、中原等の遺跡に中期中葉の阿高式土器の影響を受けた中期終末期の南福寺式や岩崎下層式の土器が見られる程度である。

縄文後期の遺跡は多く、中原、倉園A、小渕、柳井谷、家ヶ野等の遺跡がある。中原遺跡は昭和59年に発掘され、磨製石斧、小型ノミ状石斧等と共に400個を超える石錐が出土し、土器は磨消縄文、擬似縄文、指宿式が主体であったが、磨消縄文系で、瀬戸内地方の福田K II式の完形に近い土器があったことは、この地方の土器文化を考える点で重要な資料である。他にも1000点を超える土製加工品（メンコ）や軽石加工品、軽石製調整具等貴重な資料が多い。又、昭和58年に発掘された柳井谷遺跡では、指宿式、市来式、草野式等の土器類の他、块状耳筋りも出土している。

縄文晚期になると、遺跡数は多い割に、耕作による削平を受けている場合が多く、この傾向はこの時期以降、町内の中規模以上の台地に立地する遺跡でみられる。代表的な遺跡としては、小迫、道重、飛渡、山久保A等があるが、いずれも小規模な台地や丘陵に部分的に残存する。

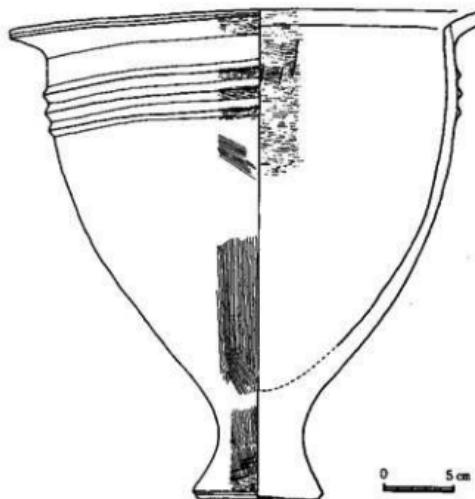
弥生時代の単独遺跡は少なく、縄文晚期の遺物と共に伴することが多い。代表的な遺跡として養輪、柳、両遺跡があり、弥生中期の山ノ口式土器を出土する。柳遺跡では住居跡も検出した。又この時期の採集遺物として、今回報告書巻頭に写真掲示した山ノ口式土器や、毛穴野遺跡出土の壺型土器口縁部がある。さらに縄文晚期以降の各遺跡で土掘具類が多数採集されており、道重遺跡や外之牧台地の下牧遺跡で出土したラケット状石器（磨製の扁平な有肩石斧）等は貴重な採集遺物である。

第1表 周辺の遺跡一覧表(1)

番号	遺跡名	所在地	地形	時代	遺物等	備考
1	小 追	田之浦小 追	台 地	縄文(晩)	黒川式 刺突点文土器	志布志町発掘調査報告書(1)
2	山久保A	* 山久保	*	* (中・晚)	阿高式 黒川式 入佐式	*
3	* B	*	*	* (早)	塞ノ神式	*
4	藏 園	* 藏 園	*	* (晩)	黒川式 塚目圧痕文 石斧	*
5	西 中 烟	* 西中烟	*	* (早)	石板式系 塚石 叩石	*
6	平原 A	内之倉平原	*	* (早・晩)	石板式 塞ノ神式 塚目圧痕文	*
7	* B	*	*	縄文(後・晩)弥生(中)	薄目圧痕文 石鏃 有肩石斧	*
8	上 原	* 上原	*	* *	黒川式 石鏃 叩石	*
9	梅 野	* 梅 野	*	*	市来式 夜臼式 石皿 石鏃	*
10	横 之 口	* 横之口	*	縄文(晩)	大石式	鹿児島考古第7号
11	費 輪	* 費 輪	*	縄文(早)弥生(中)	吉田式 山ノ口式 石鏃	志布志町発掘調査報告書(4)
12	柳	* 柳	*	* *	吉田式 石板式 軽石製品 住居址	*
13	今 別 府	* 今別府	*	縄文(晩)	大石式 黒川式 塚目圧痕文	
14	山 摂	* 山 摂	*	*	塚目圧痕文 大石系	
15	道 重	弓場ヶ迫	丘陵	縄文(早・晩)	塞ノ神式 円筒形 黒川式 石斧	
16	片野洞穴	* 片 野	洞穴	縄文(前中後晩)	轟式 曾根式 西平式 指宿式 市来式	志布志町誌上巻
17	倉 園 A	* 大 原	傾斜面	縄文(中・後)	阿高式 指宿式 大平式	志布志町発掘調査報告書(3)
18	* B	* 藏 園	台 地	縄文(早)	吉田式 前平式 塚石 運穴土坑	*
19	十 文 字	* 十文字	*	縄文(中・後)	岩崎上・下層式 指宿式	*
20	風 穴	* 風 穴	*	* (早)	石板式系 塞ノ神式 石皿	*
21	土 光 A	* 土 光	*	* (早前中)	塞ノ神式 藤日式 大平式	*
22	上 出 水	* 東 原	*	* (早)	石板式 住居址 吉田式	鹿児島考古第16号
23	出 水	* 清 烟	*	* (早)	押觸文	鹿児島考古第8号
24	上 原	* 上原	*	* (早)	吉田式 炉址	
25	中 須	* 中 須	*	縄 文		
26	立花 追	* 立花追	傾斜面	* (早中)	石板式 南福寺式 石斧	
27	東 原	帖 東 原	台 地	縄文(早・前)	塞ノ神式 曾根式 石鏃 配石	志布志町発掘調査報告書(2)
28	潤 ケ 野	* 上 原	*	縄文(早前後晩)	前平式 藤式 岩崎上層式 塚縄文	*
29	出口 A	* 出 口	沖積地	縄文 弥生	双角石器	志布志町誌上巻
30	* B	*	台 地	縄文(早晩)	前平式 塞ノ神式 三方田式 藤式	志布志町発掘調査報告書(3)
31	家 ケ 野	* 松 岬	*	縄文(後)弥生	指宿式 市来式 草野式	
32	柳 井 谷	* 柳 / 下	*	縄文(早前中後晩)	弄型文 藤式 出水式 指宿式 齊天式	志布志町発掘調査報告書(6)
33	鐵 石 橋	* 前 烟	傾斜面	旧石器 縄文	柳石刃細石核 隆帶文土器	鹿児島考古第16号
34	鐵 石	* 鐵 石	台 地	縄文(早晚)	吉田式 塚目圧痕文 石斧	
35	牧	* 牧	*	縄文 弥生		
36	二 反 野 A	* 二反野	*	縄文 弥生		
37	* B	*	*	縄文 弥生		
38	上 佐 野 原	* 上佐野原	*	弥 生		
39	横 塚	* 前 追	*	縄文(中)弥生	石斧 敲石 砕石	
40	井 手 元	* 井手元	*	縄 文		
41	上 牧	* 上 牧	*	縄 文		
42	白木牟田	* 白木牟田	*	縄文 弥生	石鏃	

第1表 周辺の遺跡一覧表(2)

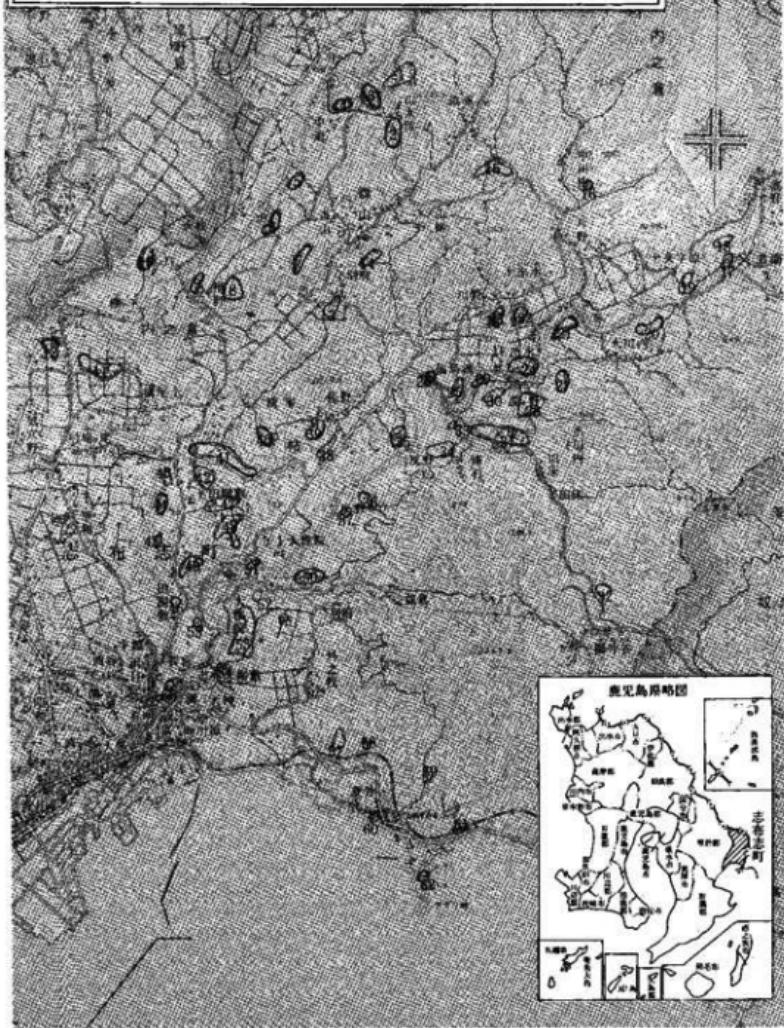
番号	遺跡名	所在地	地形	時代	遺物等	備考
43	稻荷免	帖 稲荷免	台地	弥生		
44	島 道	・ 島 道	・	縄文(早)弥生(中)	円筒系土器 集石	志布志町発掘調査報告書13
45	飛 渡	・ 飛 渡	丘陵	縄文(晚)弥生(後)	黒川式 孔列文 石棺 円盤形石斧	*
46	池 田	・ 池 田	台地	縄文 弥生		
47	下 牧	・ 下 牧	・	縄文 弥生		
48	上田屋敷	・ 堂 追	・	縄文(晚)弥生(中)	山ノ口式 住居址 有肩石斧	
49	堂 追	・ 堂 追	・	縄文 弥生	打製石斧	
50	下 田	・ 下 田	・	縄文		
51	八 反 田	・ 八反田	・	縄文(早) 弥生	前平式 黒曜石	
52	山 之 上	・ 石 通	・	旧石器 縄文(早)	石板式 塚ノ神式 石核	鹿児島考古第5号
53	石 通	・	・	縄文(早 前 晩)	吉田式 石板式 塚ノ神式 曾畠式	志布志町発掘調査報告書13
54	野 久 尾	・ 野 首	鞍 部	縄文(前 後 晩)	轟式 曾畠式 指宿式 黒川式	*
55	西 中 尾	・ 西中尾	傾斜面	縄文 弥生		
56	小 測	・ 小 測	・	縄文(中後) 弥生古墳	岩崎式 下弓田式 指宿式 市来式	鹿児島考古第5号
57	深 追	夏 井深 追	丘陵	縄文 弥生		
58	夏井土光	・ 土 光	・	縄文(早) 弥生	石板式	
59	上 園	・ 上 園	・	縄文(早)	塚ノ神式	
60	夏井ヶ浜	・ 前 田	海 岸	縄文(後 晩)	西平式 三万田式 摺領式	鹿児島考古第7号
61	引出ヶ浜土城	・ 砂 之内	砂 丘	古 墓	地下式土城	志布志町誌上巻
62	坂盛山古墳	・ 丰 田	丘陵	・	壺形埴輪 勾玉 丸玉 小玉	*



第1図 上田屋敷採集土器

第1図の土器は上田屋敷遺跡から昭和44年に採集されたもので、所有者の砂原和子氏の御協力により図化させていただいた。口縁部は「く」字状に近く外反し、端部はわずかに凹む。胴部上位に断面三角形の突帯を3条貼り付ける。底部はわずかに上げ底ぎみで裾端部は縫を持ち、凹む。外面はハケによる整形後ナデ仕上げを行っている。内面はナデであるが、口縁部近くにわずかにハケ目が残る。胎土に多量の金雲母を混入し、焼成は良好である。色調は黄褐色あるいは褐色を呈している。

志布志町管内図



1000m 0 1000 2000 3000m

第2図 周辺道路

第2表 志布志町内遺跡の主な文献資料

1. 志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書

発行年月	発行番号	調査遺跡名
1975年3月	No. 1	宮之前
79 タ	2	野久尾
タ タ	3	石踊
80 タ	4	蓑輪・柳
83 タ	5	十文字・倉園B
タ タ	6-A	柳井谷(概報)
84 タ	6-B	柳井谷
タ タ	7	倉園B
タ タ	8	井手平・池野・八郎ヶ野A・B
85 タ	9	中原
タ タ	10	倉園A・土光A・B・風穴
86 タ	11	山久保A・B・藏園・中迫・西中畠・小迫
87 タ	12	出口B・潤ヶ野・東原・博野・上原・平原A・B
88 タ	13	飛渡・島廻・白木原
89 タ	14	志布志新城址
タ タ	15	下牧・上田屋敷

2. 鹿児島考古

発行年	発行番号	遺跡名
1946年	第5号	山之上
タ	5	小瀬
48	6	橋之口
タ	7	夏井ヶ浜
タ	8	出水・倉野・板山・白木八重
80-81	14 15	東黒土田
82	16	鎌石橋
タ	16	上出水

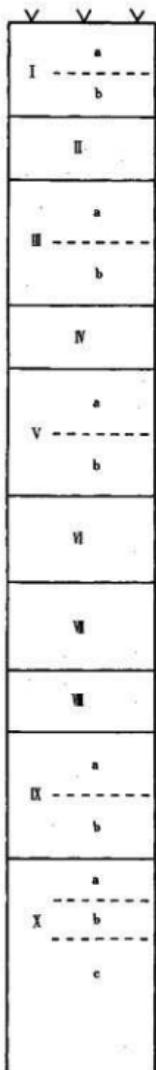
3. 志布志町誌上巻

発見年	遺跡名
M26	山宮土塁
M42	六月坂横穴
	牧野遺跡
	打出ヶ浜土塁
S8	水ヶ迫横穴
S44	下牧(上田屋敷)遺跡

4. その他の文献資料

発行年月	遺跡名	論文名	文献名	著者
1944年	出口A	大隅発見の異形石器	人類学雑誌57-7号	梅原末治
65	片野洞穴	片野洞穴発掘調査概報	九州考古学24号	河口貞徳
67	タ	鹿児島県片野洞穴	日本の洞穴遺跡	タ
65	飯盛山古墳	鹿児島県飯盛山古墳	九州考古学25・26号	上村俊雄
70	タ	飯盛山古墳とその周辺	九州考古学39・40号	タ
84	小牧古墳	特異各地域における最後の前方後円墳西日本1鹿児島県	古代学研究102号	タ

第Ⅲ章 層位



層位は場所によって若干の違いが見られるが基本的な層位は第3図に示すとおりである。

I層　褐色の表土。色調、硬さによって、2層に分けられる場所がある。場所によっては大正3年に噴出した桜島の火山灰と考えられるものが見られる部分がある。

II層　黒褐色土。

III a層　暗黄褐色土。縄文晩期を主とする遺物が出土する。

III b層　暗茶褐色土。森島の御池を噴出源とすると考えられる黄褐色の火山灰を混入する。

IV層　茶褐色土。5~20mmの白色の軽石を混入している。

V層　黄褐色火山灰層。鬼界カルデラ起源のアカホヤ（幸屋火碎流）に比定される。a、b 2層に細分される部分もあり、b層の下部は細かい軽石等を含む部分もある。

VI層　黒褐色粘質土。

VII層　茶褐色粘質土。縄文早期の遺物が出土する。

VIII層　淡茶褐色土層。硬質である。桜島を噴出源とする黄褐色の火山灰（薩摩）と考えられるものを混入する。

IX層　茶褐色粘質土。場所によっては上部が淡茶褐色を呈する部分があり、a、b 2層に細分した。

X層　シラス。場所によっては色調、硬さ等により a、b、c の3層に細分できる部分もある。

第3図 土層模式柱状図



第4図 調査区周辺の地形



第5図 トレンチ配置図

第Ⅳ章 各トレンチの調査

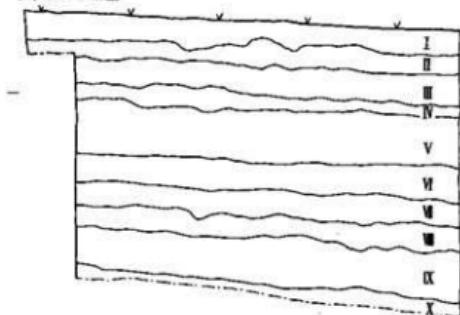
1 トレンチは調査区の北部標高約71mの地点に $2 \times 4\text{ m}$ の大きさで設定した。層位はI～X層が認められた。I層中より縄文時代及び古墳時代のものと思われる土器片が、1点ずつ確認されたが、下層からは遺物の出土は見られなかった。遺構等も確認されなかった。

2 トレンチは1トレンチの東側およそ130mの標高約71.5mの地点に $2 \times 4\text{ m}$ の大きさで設定した。層位はI～X層が認められた。II層は部分的に確認されるのみである。IV層とV層の境が南側でははっきりしなくなる部分が見られた。遺構・遺物等は確認されなかった。

3 トレンチは2トレンチの南側およそ220mの標高約68.5mの地点に $2 \times 4\text{ m}$ の大きさで設定した。層位はI層及びIII～X層まで認められた。IX層は2層に分けられ、X層は3層に分けられ、a層は淡黄褐色、b層は淡茶褐色、c層は淡黄褐色を呈している。

VII層中にピットが3基検出された。いずれもほぼ円形で、大きさは28cm、28cm、24cmで深さはそれぞれ13cm、12cm、13cmである。埋土中より遺物等の出土がなかったためその性格等は明らかでない。

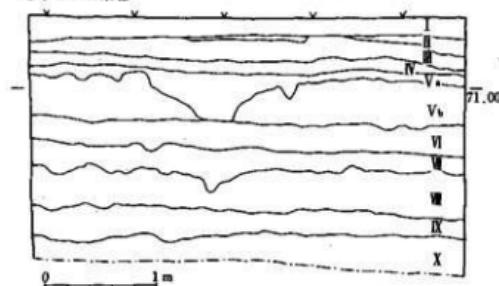
1トレンチ東壁



遺物はIII層及びIV層から出土

した。1は口縁部近くの破片である。貝殻腹縁によると思われる横位の刺突文を2条巡らしており、その下位はこれも貝殻腹縁によると思われる綾衫文を施す。内面はヘラケズリによると思われる整形である。外面にはスヌの付着が認められる。色調は褐色を呈し、胎土は石英、長石、角閃石を混入しており、焼成は良好である。2は口縁部近くの破片と考えられる。貝殻腹縁によると思われる斜位の刺突文を施す。胎土に石英、長石、角閃石を混入し、焼成は良好である。色調は黄褐色を呈する。3は外面に貝殻腹縁によると思われる文様をほどこすがはっきりしない。4は平底の底部である。外面は貝殻腹縁によると思

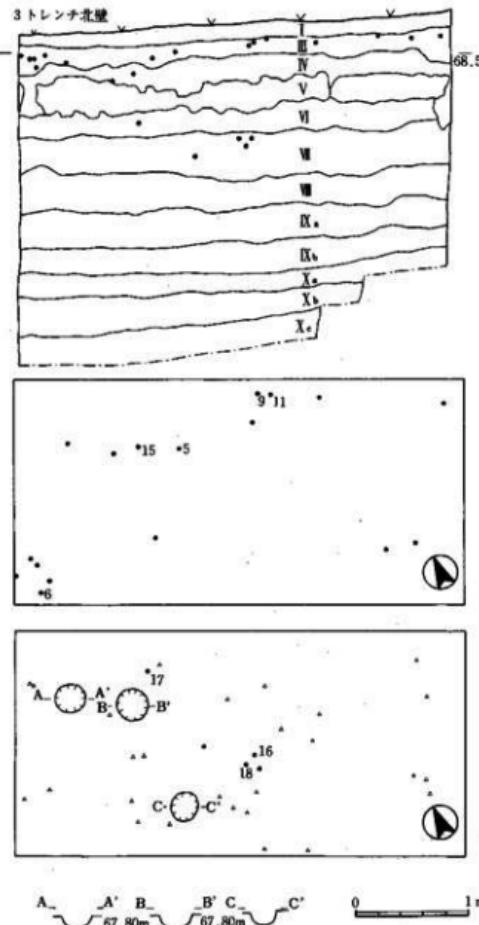
2トレンチ東壁



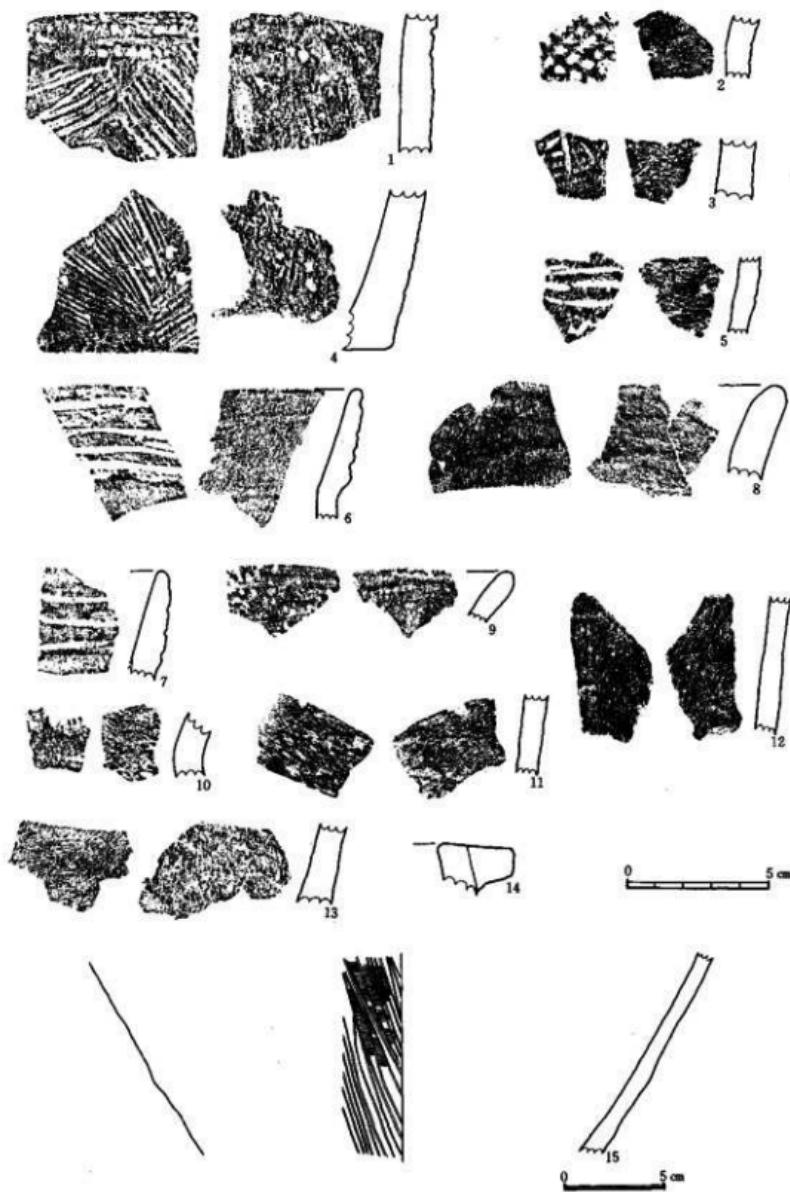
第6図 1、2トレンチ

われる条痕文を施す。内面はヘラケズリによる整形である。胎土に石英、長石、角閃石を混入し、焼成は良好である。色調は淡茶褐色を呈する。5は沈線文を施すものである。6、7は外開きの深鉢の口縁部の破片である。口縁部はわずかに肥厚し、横位の沈線文を4条巡らすが、施文はやや雑である。6は内面に接が見られる。いずれも外面にススの付着が見られる。7は内面の剥落が著しい。いずれも胎土に石英、長石、角閃石を混入しており、焼成は良好である。色調は褐色を呈している。8はわずかに外反する深鉢と考えられるものの口縁部である。胎土

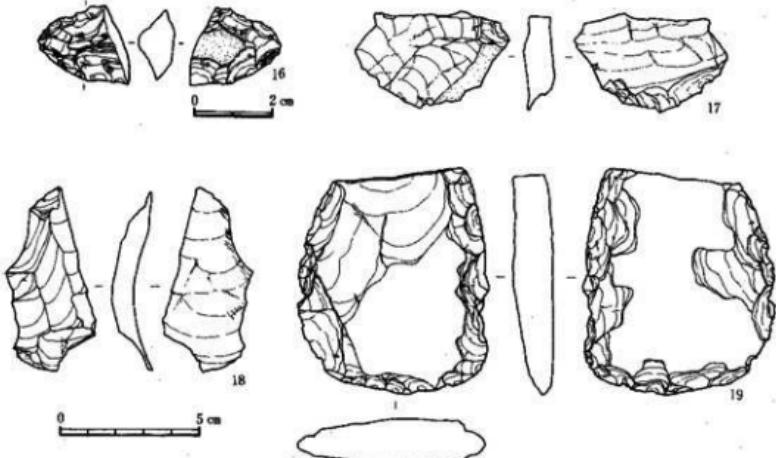
に石英、長石、角閃石を混入し、焼成は良好である。色調は黄褐色を呈している。9も8同様外反する口縁部である。10は深鉢の頸部と思われる。11、12、13は深鉢の胴部である。14は弥生時代の甕の口縁部で逆S字状を呈する。胎土に金雲母を混入している。15は弥生土器の甕と考えられるものの胴部である。外面はていねいなヘラミガキ整形で、内面にもわずかに横位のヘラミガキがみられる。胎土に石英、長石、角閃石を混入しており、焼成は良好である。色調は赤褐色を呈している。16はチャートを素材とする石匙の欠損品と考えられるものである。厚さは0.9cmを測る。片面に自然面を残す。17、18は頁岩の剥片である。17は長さ3.5cm、幅5.5cmを測り、重さ20.2gを量る。18はある程度定形化した石核から剥ぎとられたものと考えられる。長さ6.6cm、幅3.3cmを測り、重さは14gを量る。19は頁岩を素材とする打製石斧である。片面に自然面を残している。長さ8.2cm、幅6.9cmを測り、重



第7図 3トレンチ



第8図 3トレンチ出土遺物(1)



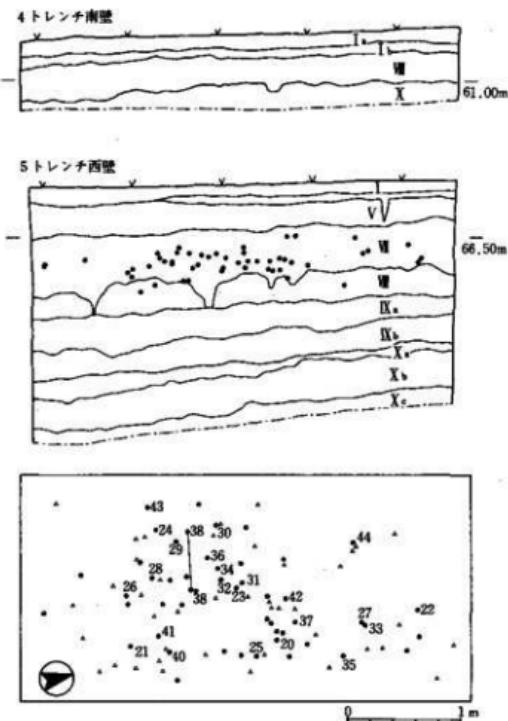
第9図 3トレンチ出土遺物(2)

き108gを量る。5、10、14、15、19はⅠ層、6～9、11～13はⅢ層、他はⅦ層の出土である。

4トレンチは調査区南東端部の標高約61.5mの地点に2×4mの大きさで設定した。南側へ突出した台地の東側端部に近い場所で、台地の東側の谷を流れる河川との比高差はおよそ30mである。層位はⅠ、Ⅳ、Ⅹ層が認められた。Ⅰ層はa、bの2層に分けられる。Ⅱ～Ⅸ層は削平されていた。遺構、遺物などは確認されなかった。

5トレンチは3トレンチの南西およそ60mの標高約67mの地点に2×4mの大きさで設定した。層位はⅠ、Ⅴ、Ⅶ～Ⅹ層が認められた。Ⅰ層の下には大正3年噴出の桜島のものと考えられる火山灰らしきものが見られた。Ⅸ層はa、bの2層に、Ⅹ層はa、b、cの3層に分けられ、a層は淡黄褐色、b層は淡褐色、c層は淡黄色を呈している。遺構は確認されなかった。

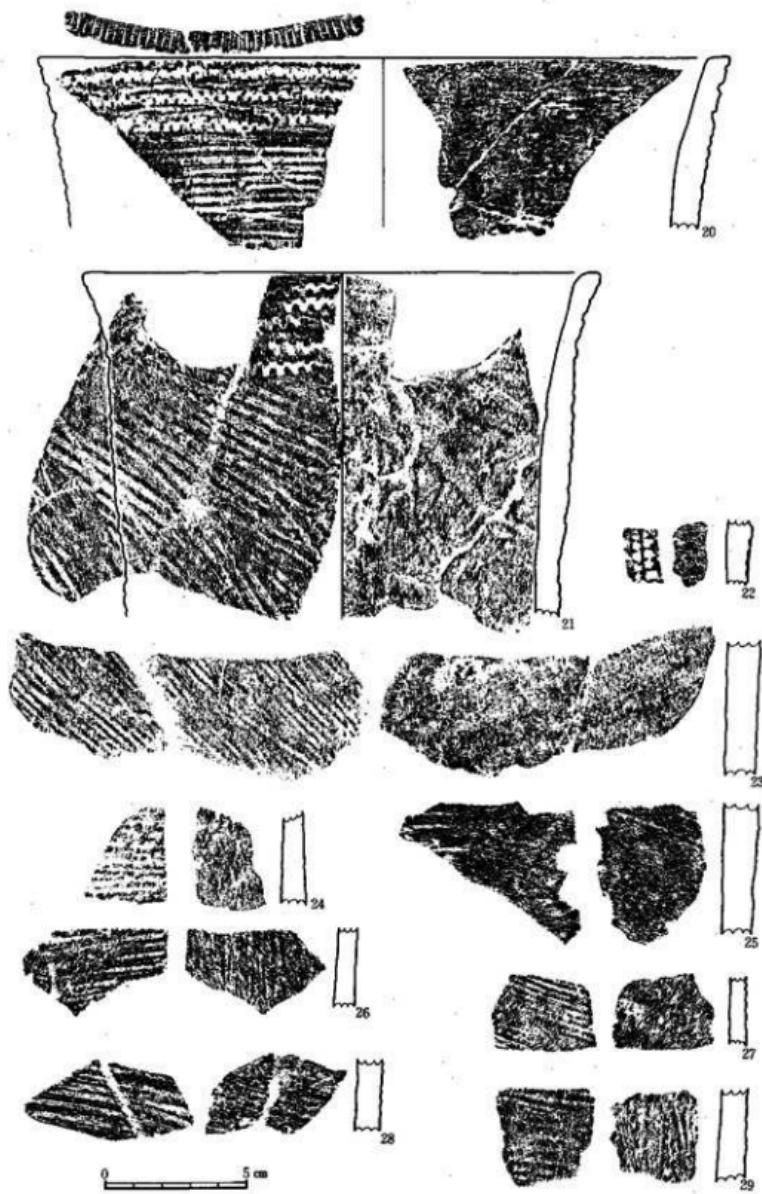
遺物はⅦ層から出土した。20は円筒形を呈する土器で、復元口径24.8cmを測る口縁部である。口唇部は平坦で、ヘラ状の物による刻みを施す。口縁部はやや外反ぎみの器形で、貝殻腹縁による横位の刺突文を3条巡らす。胴部は横位の貝殻条痕文を施す。内面はヘラミガキによる整形である。胎土は石英、長石、角閃石を混入し、焼成は良好である。色調は淡褐色を呈する。21は復元口径18.5cmを測る円筒形の土器である。口唇部はやや丸みをおびている。口縁部には貝殻腹縁による横位の刺突文を数条巡らす。胴部はややあらい貝殻条痕文を斜位に施す。内面はヘラケズリ整形である。胎土は石英、長石、角閃石を混入しており、焼成は良好である。色調は茶褐色を呈している。22は縦位の貝殻腹縁による刺突文を施す。23～32は外面に貝殻条痕文を施すものである。33、34は口縁部に貝殻腹縁による斜位の刺突文を施し、その下位に斜位の貝殻条痕文を施すものである。口唇部にはヘラ状の施文具により深い刻みを施している。35は円筒形の土器の口縁部である。口唇部はヘラ状の施文具により刻みを施す。口縁部は貝殻



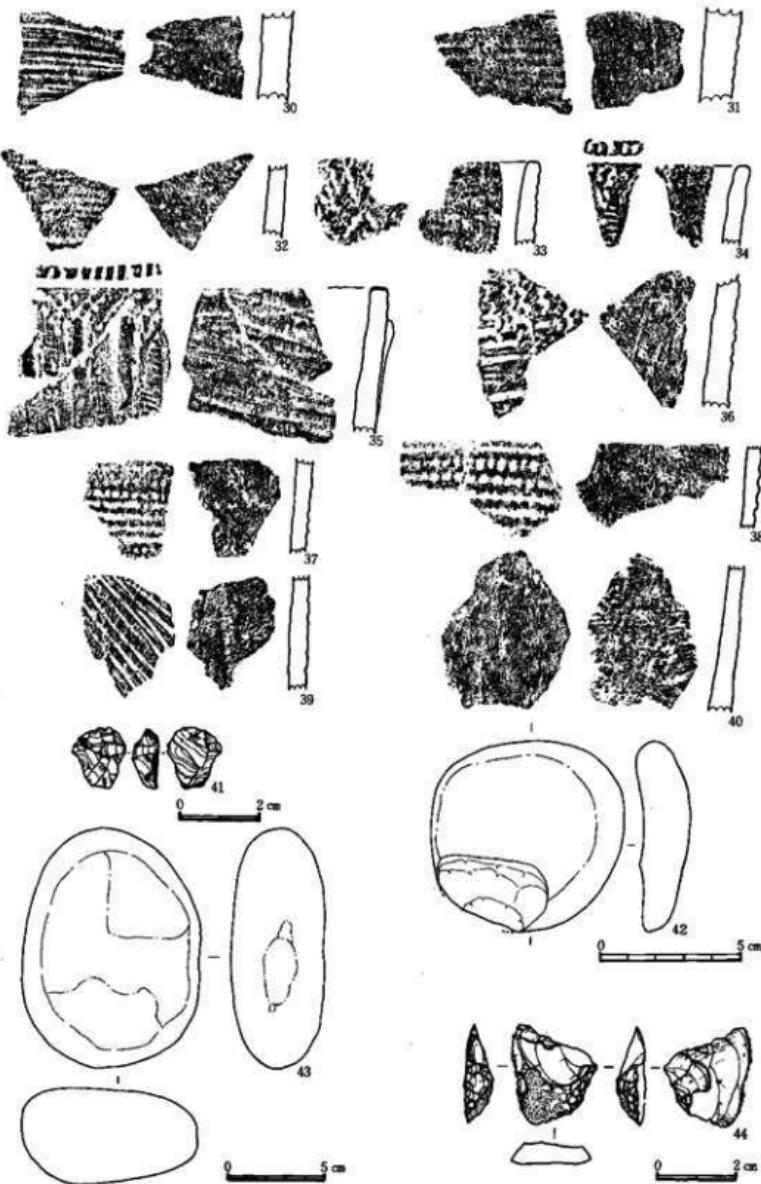
第10図 4、5トレンチ

位の刺突文を施すものである。胎土に石英、長石、角閃石を混入し、焼成は良好である。色調は淡茶褐色を呈している。40は無文の土器である。41は周辺から調整のための刺離を施し、側縁には細かい調整刺離を施すものである。片面は両極打法とも考えられる刺離が見られ、楔形石器とも考えられるものである。石材は不純物の少ない、かなり上質の黒曜石を用いている。長径 1.5 cm、短径 1.3 cm、厚さ 0.7 cm を測り、重さ 0.95 g を量る。42、43は砂岩の磨石である。42は研磨部分が凹んでいる。長径 6.9 cm、短径 6.8 cm、厚さ 1.6 cm を測り、重さ 121 g を量る。43は長径 12.1 cm、短径 8.9 cm、最大厚 4.8 cm を測り、重さ 6.5 kg を量る。44は二側縁加工の切り出し形を呈するナイフ形石器である。二側縁はやや入念なプランティングを施すが、基部は加工がない。主要刺離面はバルブを除去するため平坦刺離によって調整されている。一部に表皮面が残っている。黒曜石を素材としており、不純物をわずかに混入するが、日東産や三船産のようにひどくなく、透明度がある。原産地は明らかでない。最大長 2.5 cm、最大幅 2.1 cm、厚さ 0.7 cm を測り、重さ 2.8 g を量る。

腹縁によると思われる斜位の刺突文を施し、その下位に楔形の突帯を貼り付けている。この楔形突帯は、斜位の貝殻条痕文を施した後、貼り付けたものと考えられ、楔形突帯の間に条痕文が見られる。内面はヘラケズリ整形である。胎土は石英、長石、角閃石を混入しており、焼成は良好である。色調は淡褐色を呈している。36は円筒形土器の口縁部近くの破片である。横位の貝殻条痕文を施した後、貝殻腹縁による刺突文を縦位に施文するものである。胎土に石英、長石、角閃石を混入しており、焼成は良好である。色調は淡茶褐色を呈している。37、38は貝殻腹縁による押し引き文を施文するものである。場所によっては押し引き文が条痕状になっている部分もある。39は斜位の貝殻条痕文の後、貝殻腹縁による縦

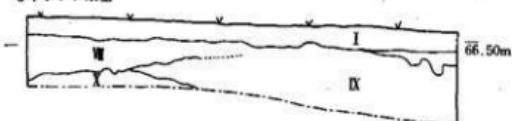


第11図 5トレンチ出土遺物(1)



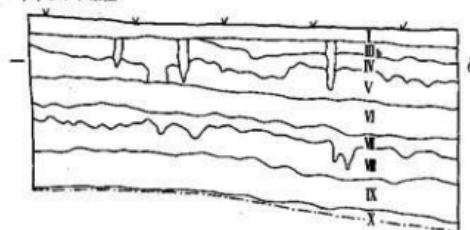
第12図 5トレンチ出土遺物(2)

6 トレンチ東壁



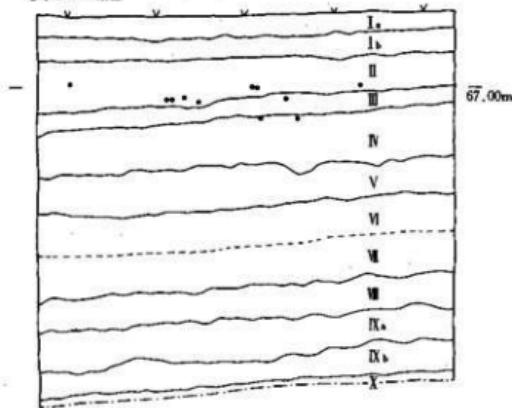
6 トレンチは5トレンチの東およそ100mの標高約66.5mの地点に 2×4 mの大きさで設定した。層位はI、Ⅸ～X層が認められた。Ⅱ～Ⅷ層は削平されたものと考えられる。トレンチの南側では、Ⅹ層とⅪ層の区別が明確でなく、Ⅰ層とⅫ層の間に淡褐色の層が見られる。遺構遺物等は確認されなかった。

7 トレンチ東壁



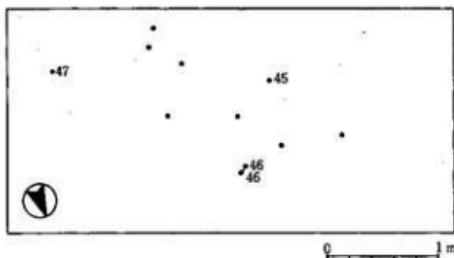
7 トレンチは6トレンチの北西およそ30mの標高約68.5mの地点に 2×4 mの大きさで設定した。層位はI、Ⅲ～X層が認められた。遺構、遺物等は確認されなかった。

8 トレンチ南壁



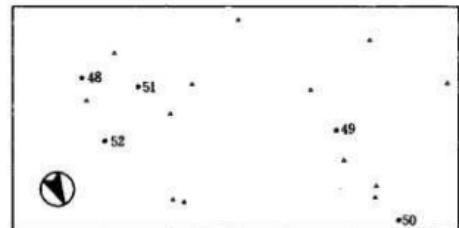
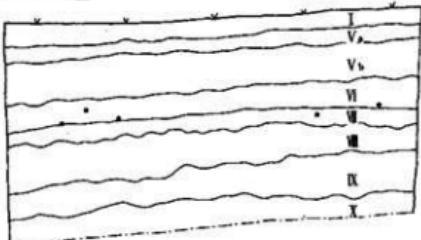
8 トレンチは7トレンチのほぼ東およそ50mの標高約67.5mの地点に 2×4 mの大きさで設定した。層位はI～X層が認められた。I層及びIX層はa、bの2層に分けられた。VII層とVIII層の間は明確な線は引けなかった。他のトレンチに比べてII層が厚く、下部より遺物が出土した。

45、46は深鉢の頸部もしくは口縁部近くと考えられるものである。「く」字状に外反する部分で、内面には棱を持ち、外面はゆるくカーブする。いずれも胎土に石英、長石、角閃石を混入し、焼成はややもろい。色調は褐色を呈する。47は砂岩を素材とする磨製石斧の欠損品である。

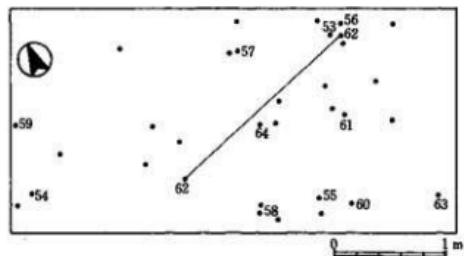
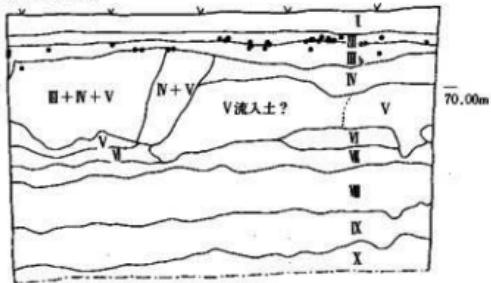


第13図 6、7、8トレンチ

9トレンチ南壁



10トレンチ北壁



第14図 9、10トレンチ

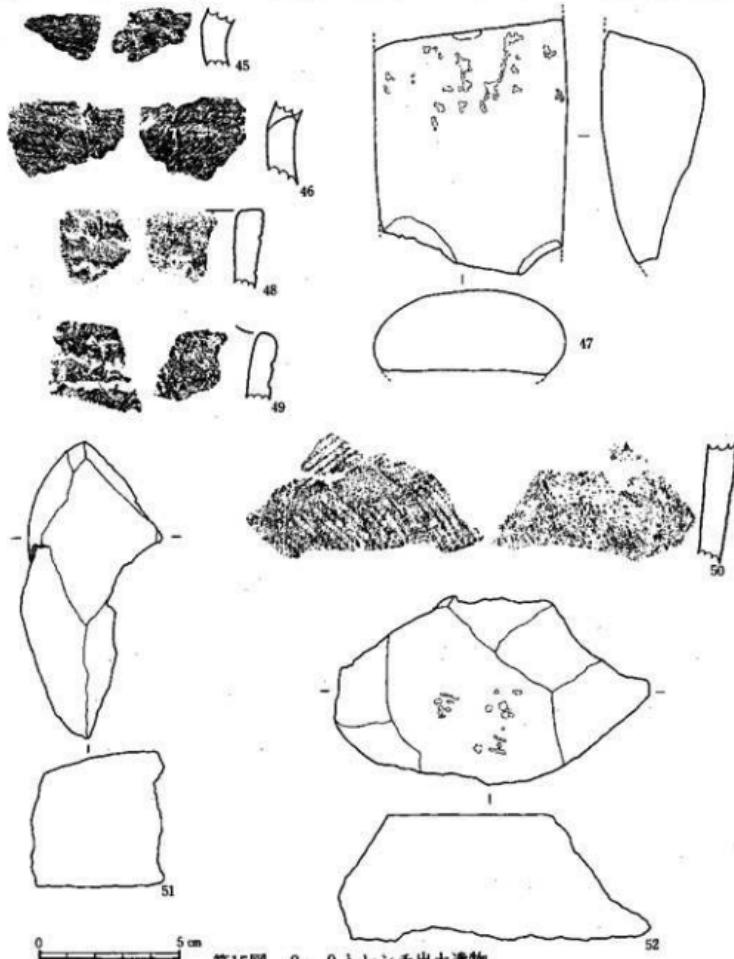
9トレンチは台地が南側へ延びる基部の東側端部に近い場所に設定した。トレンチの東およそ50mでは急傾斜となり、比高差約25mで小河川の流れる谷となる。トレンチを設定した場所の標高は約67mで、トレンチの大きさは $2 \times 4\text{ m}$ とした。層位はI、V～X層が認められた。II～IV層は削平されたものと考えられる。V層はa、b 2層に分けられた。

遺物はV層から出土した。48は直行する口縁部の破片で、口唇部は平坦になる。貝殻腹縁によると思われる横位の刺突文を数条巡らすものである。胎土は石英、長石、角閃石を混入し、焼成は良好である。色調は黄褐色を呈している。49は山形になると考えられる口縁部の破片である。口唇部はやや丸みをおびる。48同様貝殻腹縁によると思われる横位の刺突文を数条巡らすものである。内面の整形は小破片のためはっきりしないが、ヘラケズリ整形と考えられる。胎土は石英、長石、角閃石を混入し、焼成は良好である。色調は淡褐色を呈している。50は貝殻条痕文を施す胴部の破片である。外面にわずかにススの付着が見られる。胎土は石英、長石、角閃石、金雲母を含むがややあるいは。焼成は良好であり、色調

は褐色を呈している。51、52は砂岩を素材とする磨石と考えられるものの欠損品である。

10トレンチは3トレンチの北およそ70mの標高約70.5mの地点に2×4mの大きさで設定した。層位はI、III～X層が認められた。IV～VI層の間に局部断層等、何らかの自然の影響によるものと思われる土層の乱れがみられる。遺構等は確認されなかった。遺物は主としてⅢb層から出土した。

53～58は研磨された精製土器の浅鉢の破片である。53は大きく外反する口縁部で端部の内面は沈線状になり立ち上がるるものである。外面の端部近くにヘラ状のものにより、細く深い沈線



第15図 8、9トレンチ出土遺物

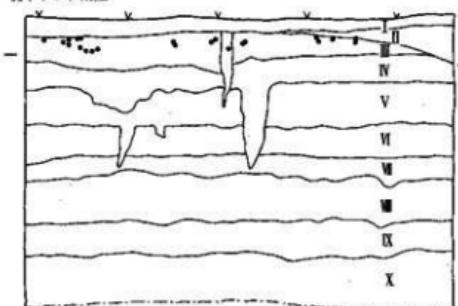
を施文する。色調は淡黄褐色を呈する。54は肩部で短く「く」字状に折れる土器で、口縁部は大きく外反し、胴部は棱を持つものと考えられる。上下とも粘土の接合面ではざれている。色調は淡褐色を呈している。55～57は棱を持つ胴部の破片である。色調はいずれも淡褐色を呈している。58は丸く屈曲する胴部で、この部分に最大径をもつものである。色調は褐色を呈している。胎土はいずれも砂粒の混入の少ない精製された粘土を用いているが、54はややあらい。焼成はいずれも良好である。59は口唇部がかなり肥厚するものである。胎土は石英、長石、角閃石を混入し、焼成は良好である。60は口唇部がかなり肥厚するものである。胎土は石英、長石、角閃石を混入し、焼成は良好である。61は深鉢の肥厚する口縁部と考えられるものである。肥厚する部分に数条の不規則な沈線を巡らしている。61の内面はヘラミガキによる整形である。いずれも胎土に石英、長石、角閃石を混入し、焼成は良好である。60は淡褐色を呈し、61は褐色を呈している。62は胴部の破片である。内面はていねいなヘラミガキであるが、外面の整形はややあらく、ハラケズリ状である。外面にはススの付着が



第16図 10トレンチ出土遺物

わずかに認められる。63は底部近くの破片である。胎土に石英、長石、角閃石を混入し、焼成は良好である。色調は褐色を呈する。64は底部の破片である。胎土に石英、長石、角閃石を混入し、焼成は良好である。色調は赤褐色を呈する。

11トレンチ南壁

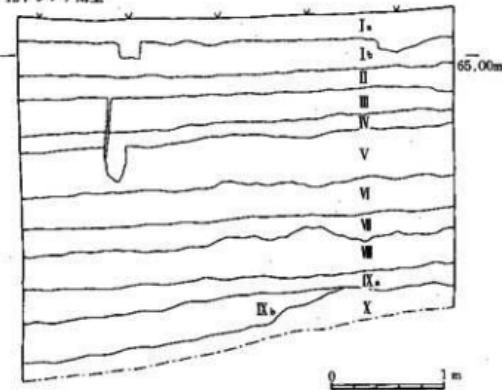


11トレンチは10トレンチのほぼ東およそ30mの、標高約71mの地点に $2 \times 4\text{ m}$ の大きさで設定した。層位はI～X層が認められた。遺物はIII層の上部から出土し、III層は2層に分けられる可能性もあるが、明確な線引きはできなかった。造構等は確認されなかった。

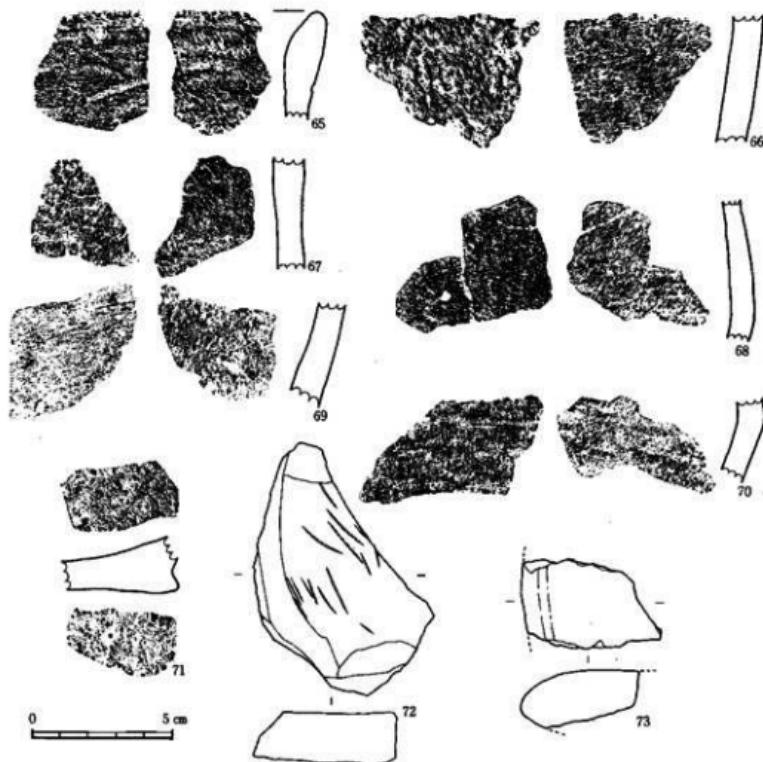
65は深鉢の口縁部と考えられるもので、肥厚し、わずかに外反する。口唇部は丸みをおびる。胎土に石英、長石、角閃石を混入し、焼成は良好である。色調は褐色を呈している。66～70は深鉢の胴部と考えられるものである。66の外面はヘラミガキ整形であるが、ややあらい。68は胴部の屈曲部より上の部分で内外面ともにヘラミガキによる整形を行っている。外面にススの付着が認められる。70の外面もヘラミガキによる整形である。71は底部である。72は砂岩の砥石と考えられるものの欠損品である。表面は全面研磨されており、中央部がわずかに凹む。直線あるいは曲線状の細くて浅いひっかき傷状のものが表面に見られる。73は磨石と考えられるものの欠損品である。

12トレンチは8トレンチの北

12トレンチ南壁



第17図 11、12トレンチ



第18図 11トレンチ出土遺物

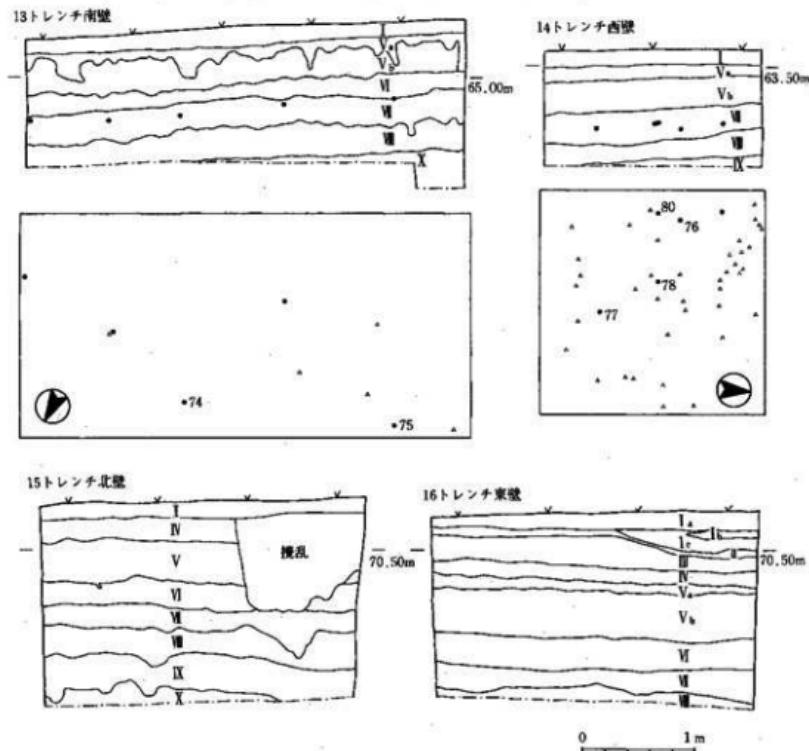
東およそ60mの標高約65.5mの地点に $2 \times 4\text{ m}$ の大きさで設定した。層位はI～X層まで認められた。I層及びIV層はa、bの2層に分けられた。遺構、遺物等は出土しなかった。

13トレンチは6トレンチの南東およそ80mの標高約66mの地点に $2 \times 4\text{ m}$ の大きさで設定した。層位はI、V～VII、X層が認められた。I、V層はa、b 2層にわけられ、II～IV層は削平されたものと考えられる。遺構等は確認されなかった。

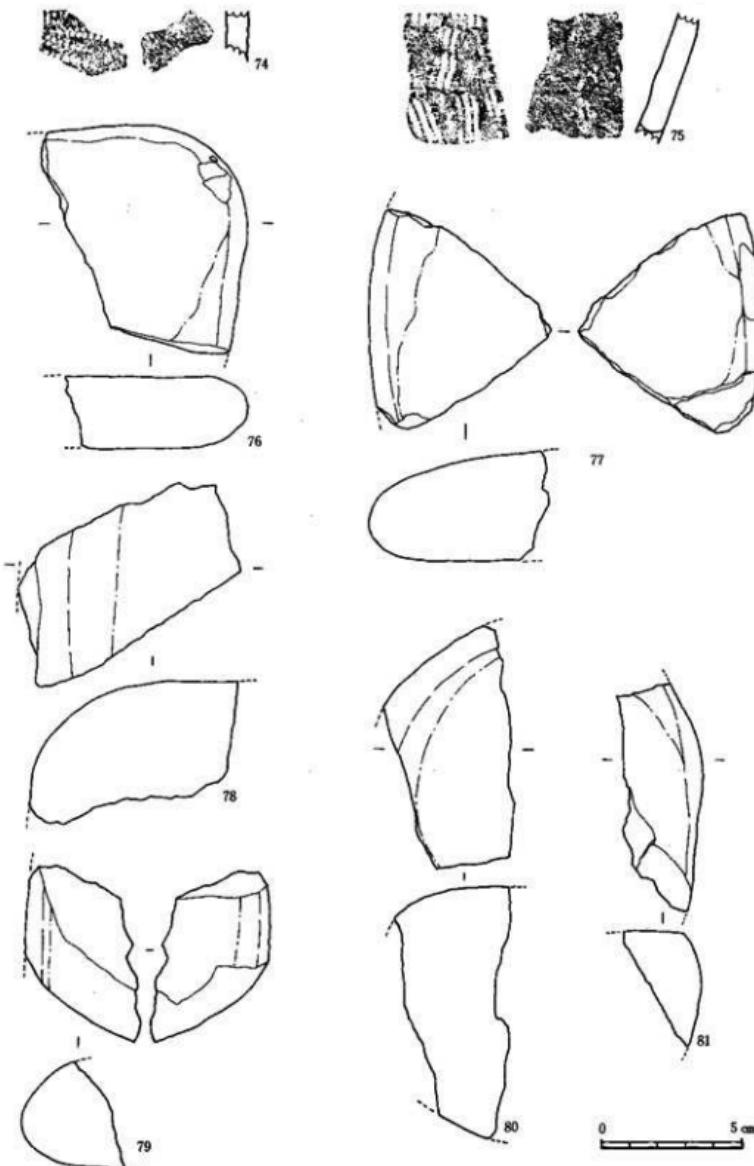
遺物はⅣ層から出土し、Ⅳ層中には礫も確認された。74は貝殻腹縁を斜位に刺突するものである。小破片のため全体的な文様構成等は明らかでない。胎土に石英、長石、角閃石、金雲母を混入しており、焼成は良好である。色調は淡赤褐色を呈している。75は貝殻腹縁と思われるものにより、縦位の短沈線文をやや間隔をおいて施文するものである。外面にわずかにススの付着が認められる。胎土は石英、長石、角閃石を混入しており、焼成は良好である。色調は黄褐色を呈している。

14トレンチは13トレンチの南側およそ50mの地点、南側へ延びる台地の先端部に近い場所の標高約63.5mの地点に 2×2 mの大きさで設定した。層位はI、V、VI～IX層が認められた。V層はa、bの2層に分けられ、II～IV層は削平されたものと考えられる。礫が多数出土しており、大多数が火をうけたものと考えられ、明確な遺構等は確認されなかったが、周辺には集石等の存在する可能性も考えられる。遺物はV層から出土したが、石器のみで土器片等は出土しなかった。76～81はいずれも砂岩を素材とする磨石の欠損品である。79はI層から、他のものはV層からの出土である。82は砂岩を素材とする石皿の欠損品である。周縁は形を整えるために調整したものと考えられる。

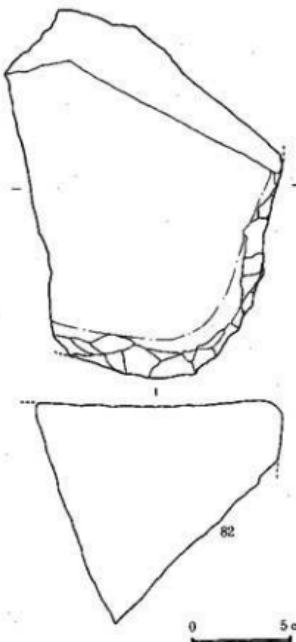
15トレンチは9トレンチの北西およそ130mの地点に標高約71mの地点に 2×3 mの大きさで設定した。層位はI層及びIV～X層まで認められた。トレンチの東側ではVI層まで擾乱されている部分が認められた。これは植樹のために穴を掘ったものと考えられる。



第19図 13、14、15、16トレンチ



第20図 13、14トレンチ出土遺物



第21図 14トレンチ出土石器

19トレンチは1トレンチの南東およそ110mの標高約65.5mの地点に $2 \times 3\text{ m}$ の大きさで設定した。層位はⅠ～Ⅶ層、Ⅸ、Ⅹ層が認められた。Ⅱ層はトレンチ南側にわずかに見られるのみである。Ⅷ層及びⅨ層は確認されなかった。

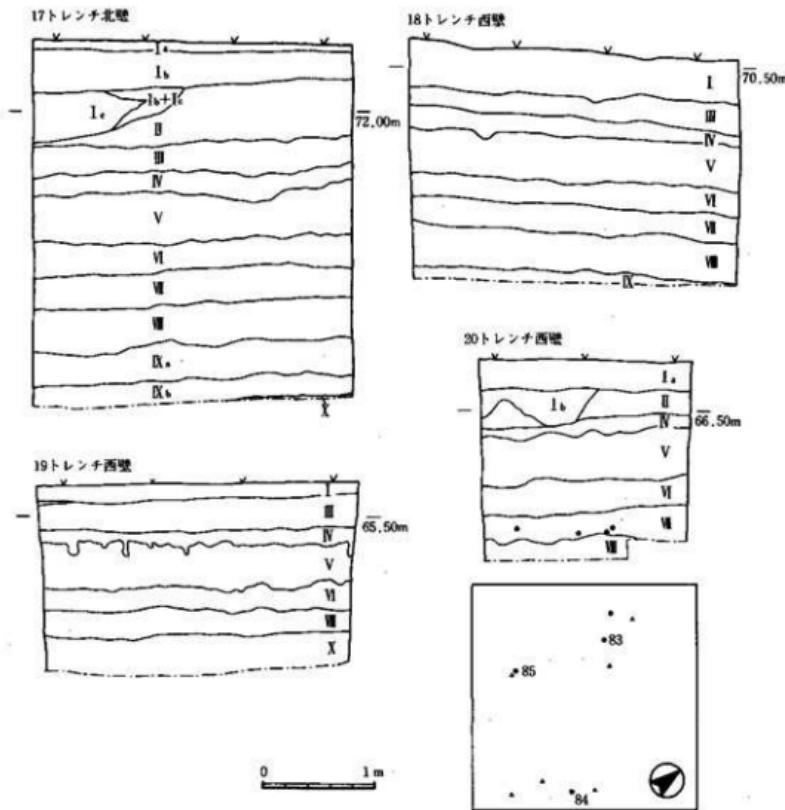
20トレンチは9トレンチのほぼ北およそ50mの地点の標高約67mの地点に $2 \times 2\text{ m}$ の大きさで設定した。9トレンチで遺物が出土したためその広がりを確認するために設けたトレンチである。層位はⅠ、Ⅲ層及びⅣ～Ⅹ層が認められた。Ⅰ層はa、bの2層に分けられた。遺物はⅧ層から出土しており、9トレンチ同様礫を伴っている。

83は円筒形を呈する土器の口縁部である。口縁部は内面に近い部分にヘラ状のものにより斜位の刻みを施す。口縁部上位は貝殻腹縁によると思われる横位の刺突文を2～3条巡らす。胴部は横位の貝殻条痕文を施している。内面はヘラケズリと思われる整形を行っている。胴部には外面からによると思われる長円形の穿孔が見られる。胎土は石英、長石、角閃石を混入し、焼成は良好である。色調は茶褐色を呈している。84は貝殻によると思われる斜位の条痕を施した後、縦位の貝殻腹縁によると思われる刺突文を数条施文するものである。胎土は石英、長石、角閃石を混入し、焼成は良好である。色調は淡褐色を呈している。85は頁岩を素材とする磨製石斧の欠損品である。

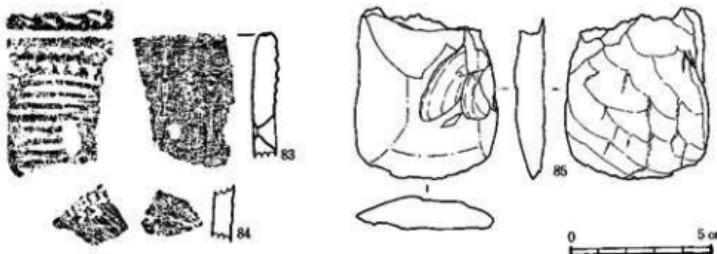
16トレンチは15トレンチの北西およそ100mの標高約71mの地点に $2 \times 3\text{ m}$ の大きさで設定した。層位はⅠ～Ⅹ層まで認められた。Ⅰ層はトレンチの南側ではa、b、cの3層に分けられた。Ⅰc層は大正3年に爆発した桜島の火山灰と考えられるものである。V層はa、bの2層に分けられた。遺構、遺物等は確認されなかった。

17トレンチは調査区の最西部、1トレンチの西およそ130mの標高約72.5mの地点に $2 \times 3\text{ m}$ の大きさで設定した。層位はⅠ～Ⅹ層まで認められた。Ⅰ層はa、b、cの3層に分けられる。Ⅰc層は大正3年に爆発した桜島の火山灰と考えられるものである。これはⅡ層の中へ落ち込み状に堆積していることから、穴を掘りその中へ火山灰を集めたものを埋めたとも考えられる。Ⅸ層はa、b 2層に分けられた。遺構、遺物等は確認されなかった。

18トレンチは2トレンチの北西およそ60mの標高約70.5mの地点に $2 \times 3\text{ m}$ の大きさで設定した。層位はⅠ層及びⅢ～Ⅹ層が認められた。遺構、遺物等は確認されなかった。



第22図 17、18、19、20トレンチ



第23図 20トレンチ出土遺物

第V章 まとめにかえて

下牧遺跡・上田屋敷遺跡の発掘調査では合計20箇所のトレンチを設定して調査を実施した。下牧遺跡は以前、縄文土器、弥生土器が採集されているが、今回調査を実施した範囲内では遺構・遺物等は確認されなかった。しかし、調査中に周辺地域の表面採集を行ったところ、台地北東部の崖面に遺物が露呈していた。遺物は茶褐色の粘質土層にはまっており、この層は調査地区の標準土層のⅢ層に比定されるものと考えられる。遺物は円筒形の土器片であり、縄文早期のものと考えられる。この遺物が確認された場所は、今回の調査対象地区に入っておらず、その出土する範囲等は明らかにできなかった。今後、詳しい調査が必要である。

上田屋敷遺跡は、昭和44年に弥生中期の山ノ口式土器の完形が出土した遺跡である。今回の調査では、この弥生時代の遺物は3、8トレンチから出土している。3トレンチでは包含層は削平されており、Ⅰ層から14、15の遺物が出土している。14は逆L字状を呈した甕の口縁部であり、15は甕の肩部と考えられるものである。8トレンチではⅡ層から弥生時代のものと考えられる細かい土器片と共に、47の石斧片が出土している。このようなことから、弥生時代の遺物包含層は、8トレンチ周辺にわずかに残存しているものと考えられる。

3、10、11トレンチでは、縄文時代晩期の遺物が出土した。遺物包含層は、霧島の御池を噴出源とすると考えられる火山灰を混入するⅢb層上部のⅢa層である。6、7、60、61は深鉢の口縁部と考えられるもので、肥厚する部分に数条の沈線を巡らしている。54は浅鉢の破片である。肩部で短く「く」字状に折れるもので、口縁部は大きく外反し、肩部は稜を持つと考えられるものである。これらの土器は入佐式土器と考えられる。71は深鉢の底部である。外面の下端は張り出し、内面は肩部との境が明瞭でなく、なだらかに移行しているものである。これは黒川式土器と考えられるものである。

3、5、9、13、14、20トレンチからは縄文早期の遺物が出土した。3トレンチと5トレンチ、13トレンチと14トレンチ、9トレンチと20トレンチとそれぞれ台地の端部の3箇所の地域で遺物が出土しており、台地の中央部では遺物等は確認されなかった。それぞれのトレンチで礫を伴っており、特に14トレンチでは礫の出土が多かったが、集石等の遺構となりうるようなまとまった出土状況ではなかった。遺物は石板式土器、吉田式土器、前平式土器の他に13トレンチで出土した75は溝辺町の桑ノ丸遺跡出土の3類土器や、枕崎市の奥木場遺跡出土のⅢ群土器2類と同様のものである。このような早期の土器と共に磨石等が多数出土しているが、これらは火を受けたと考えられるものが多く見られた。

44はナイフ形石器である。1点のみの出土であり、かつ縄文早期の遺物を出土する層からの出土であるため、即断はできないが周辺には旧石器時代の遺物包含層が存在する可能性も十分考えられる。

図 版



遺跡遠景（東から）



遺跡近景（10、11レンチ付近）

図版 2



調査風景（5トレンチ）



調査風景（11トレンチ）



1 トレンチ土層断面



3 トレンチ柱穴確認状況

図版 4



3 トレンチ遺物出土状況



4 トレンチ土層断面



5 トレンチ遺物出土状況

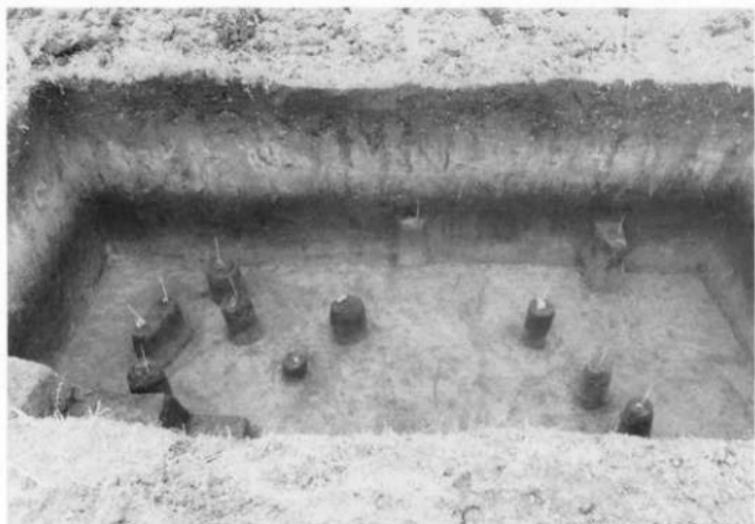


5 トレンチ土層断面

図版 6



8 トレンチ遺物出土状況



9 トレンチ遺物出土状況

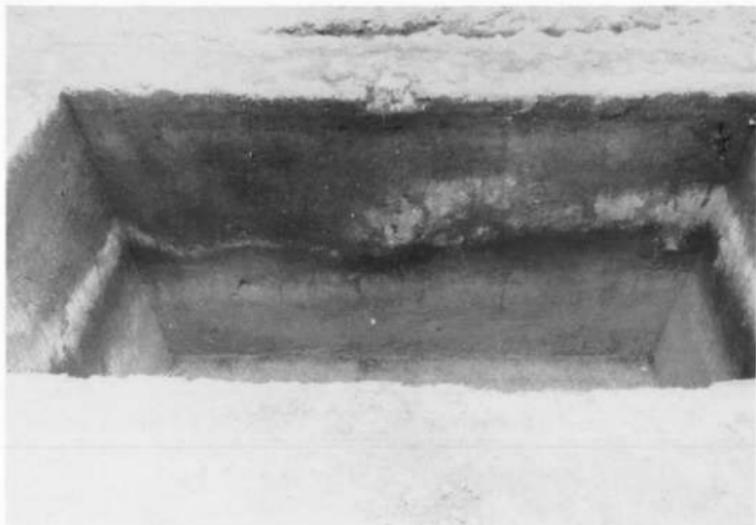


9 トレンチ土層断面



10 トレンチ遺物出土状況

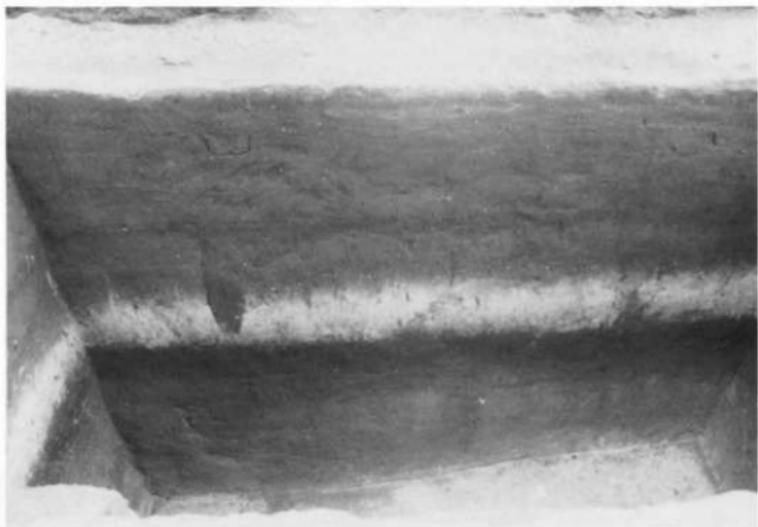
図版 8



10 トレンチ土層断面



11 トレンチ遺物出土状況



12 トレンチ土層断面



13 トレンチ土層断面



14 トレンチ遺物出土状況



15 トレンチ土層断面



18 トレンチ土層断面



19 トレンチ土層断面

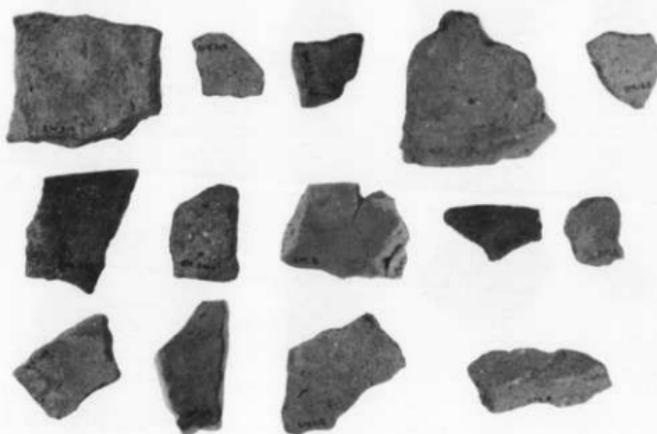
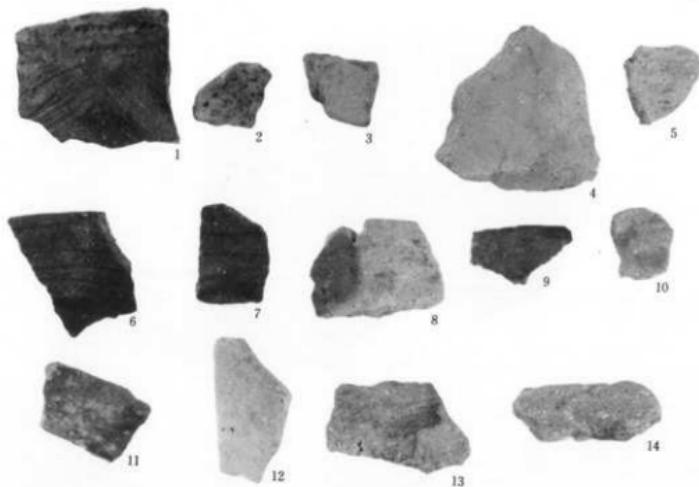


20トレンチ遺物出土状況



上田屋敷遺跡採集遺物

図版13



出土遺物(1)



15



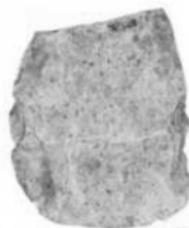
16



17



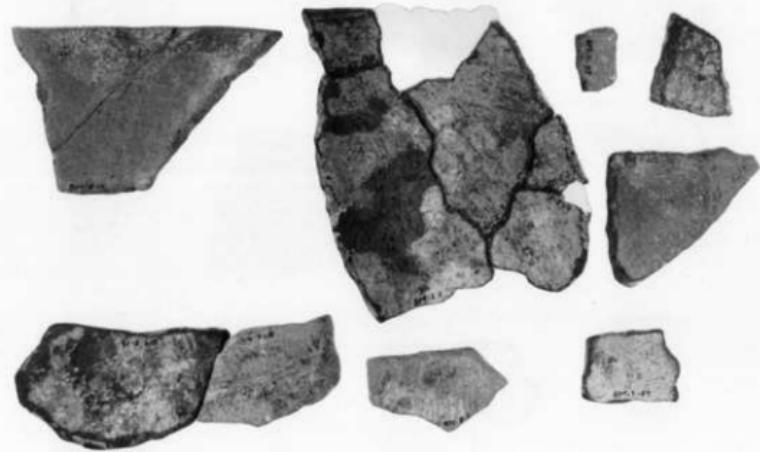
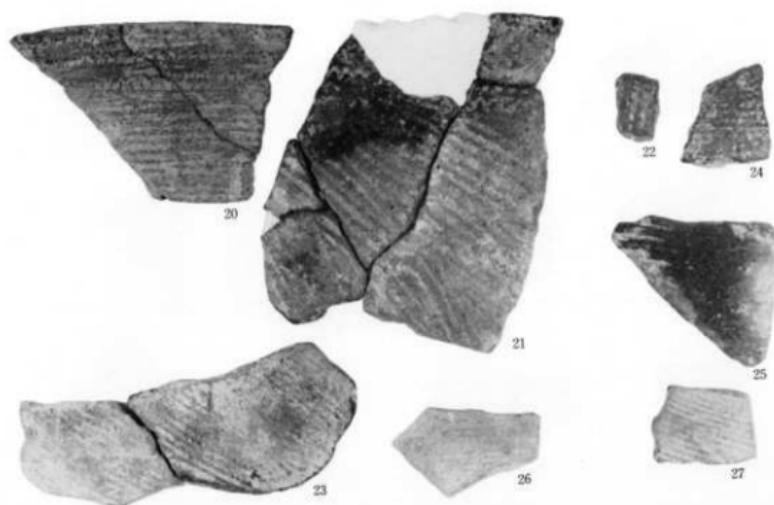
18



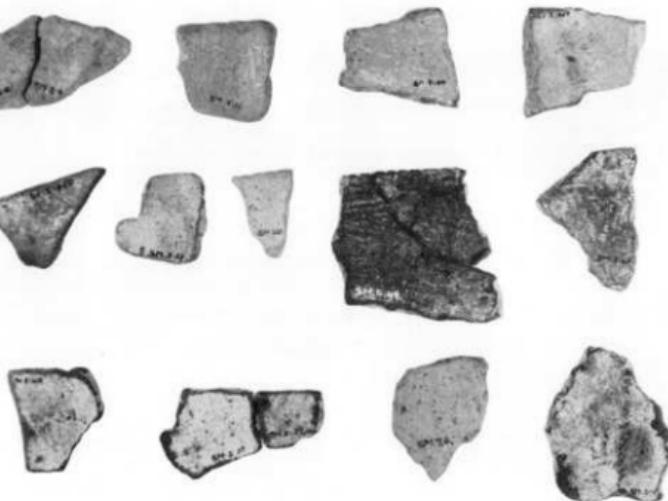
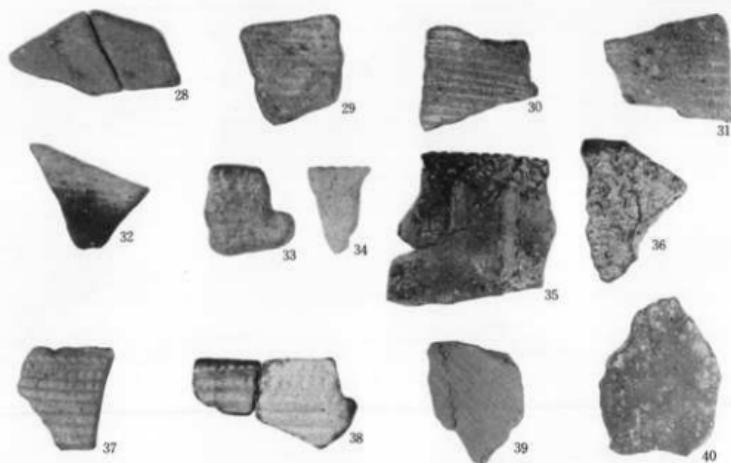
19



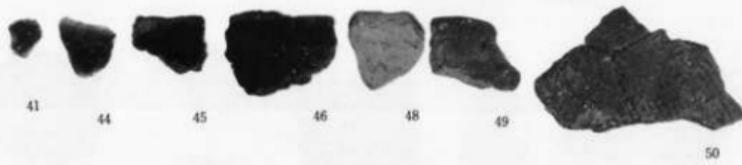
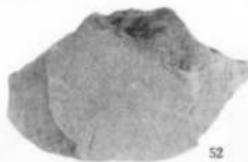
出土遺物(2)



出土遺物(3)

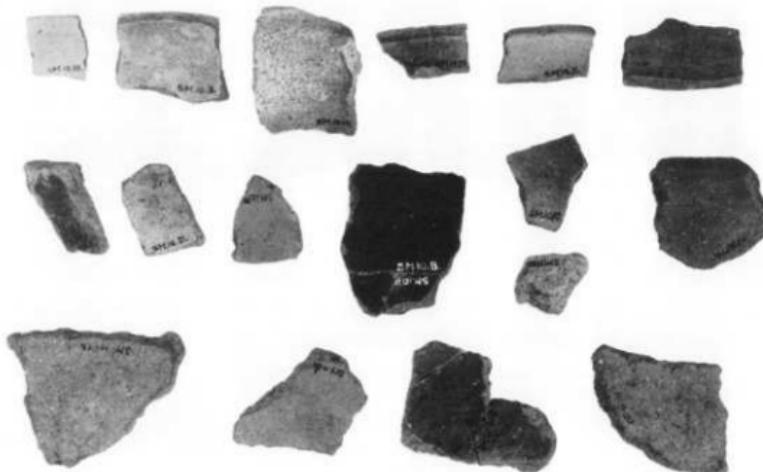
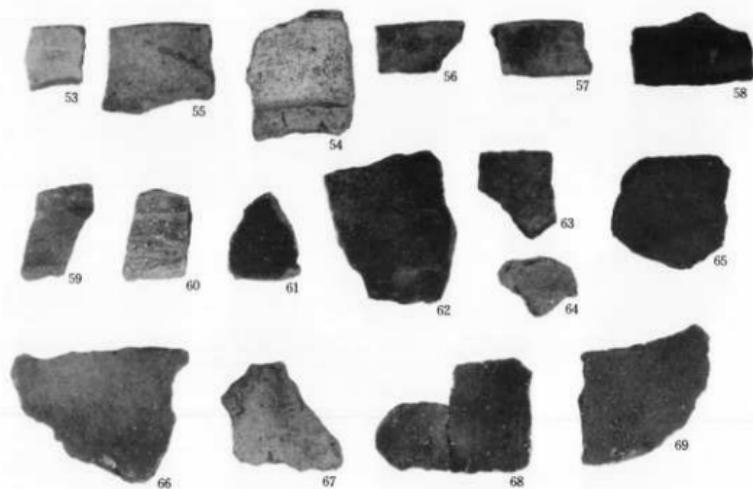


出土遺物(4)



出土遺物(5)

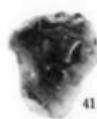
图版18



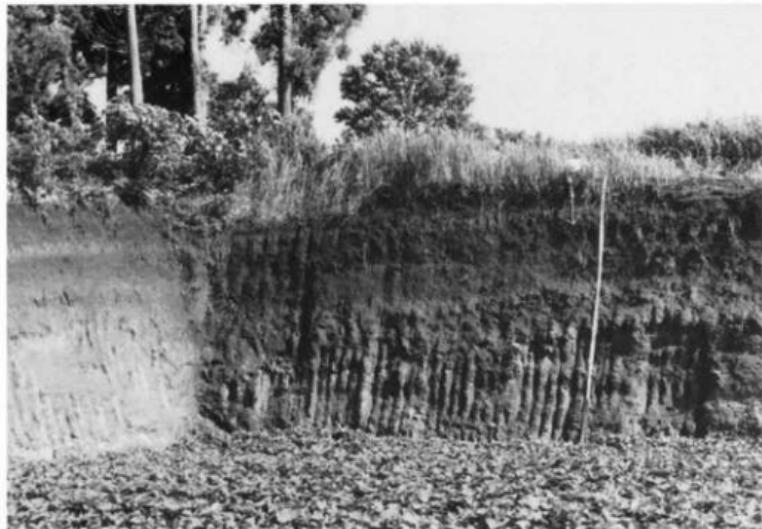
出土遗物(6)



出土遺物(7)



出土遗物(8)



下牧遺跡北東端部壁面遺物露呈状況



調査参加者

あとがき

下牧遺跡・上田屋敷遺跡の調査は6月～7月の梅雨時期であったが、比較的好天に恵まれ調査は順調に進んだ。

上田屋敷遺跡からは、以前、弥生土器の完形品が採集されており、包含層の存在が予想されたが、今回、調査した範囲内では、明確な包含層は確認されなかった。

調査に携わっていただいた地元の方々は、初めての経験の人や、過去に数回の発掘調査を経験された人などさまざまであった。このような人々により、広い畠地に点在するトレンチで、遺物が出土しないときは、スコップや山クワによる重労働、遺物が出土すると、移植ゴテにより細心の注意を要する作業が続けられた。

また県教育庁文化課収蔵庫の作業員の方々には、整理、報告書作成作業に従事していただいた。

このように多くの方々の協力によって出来上がったこの報告書が、担当者の力不足により、必ずしも十分とはいえないが、少しでも役立てば幸いである。

最後に、調査及び整理作業に従事していただいた方々の氏名を記して感謝したい。

発掘作業……山下重盛 藤崎安雄 上迫兼利 山村又男 小守信夫
山村照男 吉井ミヤ 野村洋子 中山俊江 桜木嘉子
有留ヒミ 知覧サエ 砂原和子 小守ツヤ 後追政子
樽野次子 浜田マサ子 澄明美 鶴田テル 重田君江
山村ハルミ 出口志津子

整理作業……前之園俊子 川畑恵子 相良政子 宮岡雪子

志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書(15)

下牧遺跡・上田屋敷遺跡

発行日 1989年3月

発 行 志布志町教育委員会

鹿児島県曾於郡志布志町志布志2542

印 刷 志布志印刷有限会社

鹿児島県曾於郡志布志町安楽1966-2

T E L (0994) 73-1076